（『国語学』179集　1994・12・31）

〔書　評〕

『言語学』

風間喜代三
上野　善道
松村　一登　著
町田　健

石綿敏雄

本書は大学の言語学のテキストとして書かれたものである。本書の内容を目次の章立てで示すと次のようになる。

序章　言語学とは何か
第一章　語の構造
第二章　文の構造
第三章　語の意味
第四章　文の意味
第五章　言語の類型
第六章　言語の変化
第七章　音の構造

終りに、国際音声字母、世界言語地図とあとがき・索引が添えられている。序章の「言語学とは何か」ではソシュールとチョムスキーの理論が解説されている。執筆は、序章、第一章、第五章を松村一登氏、第二章、第三章、第四章を町田健氏、第六章を風間喜代三氏、第七章を上野善道氏が分担している。あとがきには風間氏の署名がある。

一

本書が言語学のテキストであること、テキストを作ろうとしていること、この点について四人の著者がそれぞれに努力していることはよくわかるが、どういう視点からそれぞれの分野の記述を行うかについては、四人の著者の間に相当大きな開きがある。微細に見れば四人それぞれに違うのであるが、評者の見るところ、大きく分けて次の二者になる。

序章から第五章まで
第六章と第七章

後者の、第六章と第七章では、言語の研究レベルのなかで、すでに安定し確立した視点に立って、できるだけ平易に、従来の研究成果や言語それ自身について説明しようとしている。これに対して、第一章から第五章までは、現在研究がはげしく進展し、多くの異なる

考えかたが行われるなかで、そのもっとも先端的な研究視点のひとつを選んで、その視点から、この分野全体を展望しようとしている。これが評者の見かたである。

そうはいっても、第六章と第七章とでも少し違っていて、第七章では異なる見かたについての言及がある。そこには生成音韻論の内容も紹介されている。

序章から第五章のあいだもかなり違っていて、序章、第一章、第五章は現在の研究状況を広く見わたして、全体を平易に解説しようとする傾向が強いのに対し、第二章から第四章にいたる部分は、ひとつの立場をとってその立場から統一的に言語のその部分の構造を見ようとしている。きわめてはっきりとした立場をとっており、ひとつの独自の見解を示すものといえる。あるいは、そういう方法でこの分野を解説しようとしている、ともとれる。

このように著者たちの態度に不一致が見られるが、これには、あるいは、それぞれの分野の事情がしからしめている、ということもあるかもしれない。そして、いってみれば、そのような解説態度の不整合ということが、本書のひとつの性格であると同時に、やや自由な態度で書かれていることが、逆に本書の魅力であるとも思われる。言語学の分野全体を見わたすということがきわめて困難な状況になりつつある今日、テキストがこのような性格をもつのは、やむをえないというより、むしろ自然であるというべきかもしれない。

次に、本書が領域を制限したということについて考えてみる。本書の「あとがき」に、「とりあげる項目は言語学のごく中心の部分に限ることとした。現在わが国でもこの学問の進展に伴って、その全領域にふれた概説書も数多くみられる。それらはどれも、この分野の専攻の学徒には有益なものであるけれども、われわれとしては言語学という学問の基本になるものと、その考え方を知るのに何が必要かという立場に立って、あえて領域を限定し」とある。

どうして領域を制限するのか、その理由については「あとがき」でふれてはいない。これについては、評者は勝手に次のような理由を考えてみる。およそテキストであるかぎり、あまり部厚いものになっては困るという出版者がわからの要請があったとみるのである(この推測がはずれたばあいは、ただあやまるしかない)。ページ数に制限があれば全分野についてうすく書くか、分野を選んでその分野についてなるべく十分な説明をするか、ということを選択することになる。本書ではこの後者を選択したのだと推測する。ただし、そのばあい、どの分野を選ぶか、「言語学という学問の基本になるものと、その考え方を知るのに何が必要か」と考えるのかについては、本書のような選びかた以外にも、別の選びかた、が種々ありうると思われる。この書評では、そこに大きな問題があるということを指摘するにとどめて(その一端についてはあとでふれることにして)、ここではあえて著者たちの選択を是としよう。そして、その理由として、現代の言語学でもっとも多くの話題が集中している、シンタクスを中心とした理論言語学の存在が考えられ、他方、世界の多くの言語の研究が進んで類型論も話題を集めているということがあって、その系統の話題を著者たちの考えで組織立てたものが第一章から第五章までである。第六章と第七章を著者たちはその次の話題と考えた、という印象を評者はもっている。そうでなければ第七章がなぜここに置かれるのか、理解できないのである。

評者はここまで、著者たちに、ある意味で同情的に、評者の見解

を述べた。しかしこの時点で、このような選択を行ったことについての、プラス面とマイナス面を考えてみたいと思う。

プラス面としてはやはり取りあげられた個々の部分の記述をくわしくすることをあげることができよう。たとえば類型論についてかなり十分な記述を行うことができた。まずなにより、第二章から第五章にいたる語の意味から文の構造、文の意味にいたる、一貫した記述を行うことが可能になった。その内容についてはあとであらためてふれたいが、現代言語学の中心課題について、まとまった、一貫した、意欲にあふれた記述ができたということはプラス面の第一にあげてよいと思う。

マイナス面としては、やはり重要な分野が脱けていることをあげるべきだろう。社会言語学が脱けおちている。また、語はあっても語彙がない。以上はほんの一例である。あえて領域を限定し、省いた部分はそのままにしたために、たとえば次のようなことがおこる。五二ページと一六三ページには、たまたま本文に登場した特定の言語についての解説が、非組織的に比較的詳細に、丁寧に行われている。また、一八八ページにはロマンス語に所属する言語が、その主要なものを列挙しているのに、一九〇ページではpからfへの音の変化を「英語も他のゲルマン語とともにその歴史の始まるまえに経験した」と記述しているが、他のゲルマン語にどんな言語があるのかについてはふれていない。これは省略した部分について、まとめて、ごくあらく記述した章または付録がもしあれば、ある程度救うことができたのではないかと考えられる。

二

言語の変化と音の構造のことについてふれよう。第六章の言語の変化では史的言語学の研究成果が解説されている。これはいかにもベテランが平易に丁寧に解説したという感じのものである。例としてあげる言語もなるべく英語など、一般の学生に親しみのあるものを選んでいるようであり、日本語の現象も随所で言及されている。言語の変化は史的言語学の分野で、記述は比較言語学の入りぐちのところで終っているが、欲をいえばもうすこし比較言語学のなかにはいってもよかったのではないか、あるいは言語の変化の社会言語学的側面を取りあげてもよかったのではないかという感じをもつ。

音の構造は調音言語学と構造言語学の音韻論の解説を主としている。これもベテランの平易で丁寧な解説である。取りあげる例は日本語を主体にしている。ことに音韻論では徹底して日本語を取りあげている。

音形の分野の記述では、異なる考えかたがいくつか紹介されている。そのどれについてというのではないが、おもなものについては、だれの説か、をはっきりと書いておいてほしいものもある。序章の言語学とは何かなどでしきりに多くの学者の名が引用されているが、たとえば日本語の母音長音の取りあつかいなど、大家のあいだで、大きな相違のあるところがある。言語学入門、日本語学入門のテキストには学者による見解の相違を、おもなものについては明示してあるものがある。言語学概論、日本語概説などの講義を担当するもののたちばからいうと、この学者による見解の相違が明記されているテキストのほうが扱いやすいように思うがいかがであろう

か。本書では異説があるとき、だれの説かということはあまり取りあげないで、どこに見解の相違があるかを客観的に説明しようとしている。

そういう意味で、音の構造の部分で、生成音韻論の考えかたと取りあつかいについて言及していることは、たいへんよいことであったと思う。たとえば音便形「待った」などの扱いが、ここで具体的に解説されている。これは第二章文の構造のなかの注の部分で、「はしる」に「た」のついた「はしった」が「音韻のレベルの現象として処理」されるという記述と符合して、本書の読者にとって、ひじょうに理解しやすいものになっている。入門用のテキストであっても、異説についての記述があるのはむしろ親切であり、そのとき、ここに言及したように、章のあいだで、異説のなかのあるものとあるものが互いに関連することを読者に気づかせることは、もっとも望ましいことであろう。

三

序章はソシュールとチョムスキーの言語理論の基本事項を説明し、そのことによって「言語学とは何か」という問いに答えようとしている。

ソシュールの理論の説明にあたっては、ソシュールのあげた例そのままを引用し、そこから一歩も出まいとするのではなく、むしろ逆に現在の問題意識を尊重し、現時点での関心から見つめなおして考えようとする態度が目だつ。それは多くの例をあげることができるが、そのなかからひとつをまず選んでみよう。「講義」の訳では統合関係と連合関係という訳語が当てられた部分がそれである。ソシュール自身は、統合関係の例としては語の内部の統語構造を問題にしている。しかし、連合関係の例としては語の内部の例もあげながら、同時に語自体の例も示している。その語自体についての統合関係を考えるならば、語と語の統合関係、語の外部的な統合関係を考えるのは当然のことになる。そこで、本書では「厚い雑誌を読む」というような統合関係にも着目した説明を行っている。評者は著者のこの行きかたに賛意を表したい。ひとつには、ここでは言語学史を取りあつかおうとしているのではなくて、ソシュールの見かたをとおして言語それ自身の性質を語ろうとしているからである。次に、ソシュールの「講義」の成立事情からみて、このように取りあつかう必要も考えられよう。適切な表現ではないかもしれないが、これを、ソシュールの現代解釈と呼ぶことにする。序章のソシュールは現代解釈のソシュールであり、ソシュールの現代解釈は第三章にも見られる。

序章の著者は、ソシュールがラングについて具体的にどのようなものをイメージしていたかは、「講義」からよくわからないが、通説によれば「様々なシンタグム関係やパラダイム関係に立つ言語記号（すなわち語）が作りあげている一種の辞書のようなものであったろうと考えられている」という。

ソシュールは具体的な文がパロールに属すると考えていた（「講義」第二部第五章）が、「しかし、ソシュールは、すぐ続いて、「地球は回る」というような文は「一般的な型」にもとづいた文であり、この種の「一般的な型」はラングに属するともいっている。これはいい換えると、個々の具体的な文はパロールに属するものの、これらの文を組み立てるときに用いられる一般的なパターンは、ラング

に属していなければならないということと同じである。つまり、ソシュールは、具体的な文とその文を作るためのメカニズムとを区別していたと考えられるのである」と著者はいう（一〇〜一一ページ）。そうして「文を作るためのメカニズム」が、前述の「辞書に相当する」ものと同時に、「ラングに含まれている」と解釈する見かたを延長していくと、「もしこのような解釈ができるとすれば、ソシュールのラングは、一般にいわれているほど、チョムスキーの文法（＝言語能力）の概念と大きく異なっているとはいえないことになる」という結論に達する。そこから「チョムスキーが、言語学者の仕事は言語能力を記述することだと規定するのは、ソシュールが言語学の対象はラングだと規定しているのと同じ精神である」（一三ページ）という結論にも行きつく。二十世紀を代表するこのふたりの言語学者が、そこに共通する考えかたをもっているとする見かたはきわめて興味深い指摘である。これはもはや入門のためのテキストというより、入門を終った人にそれを総括するときのテキストとしてのレベルに達しているといわざるをえない。ことに、いま述べたことと、チョムスキーについて次のように述べたことと考えあわせると、いよいよ興味深いことになる。アメリカの構造主義言語学者たちは実際に発せられたり、書かれたりした文を集めたもの、いわゆるコーパスを分析・記述の対象とし、そこで観察される特徴や規則性を記述することが言語学者の仕事であると考えていた。チョムスキーはそれに対して、「実際に発せられた具体的な文の研究を通じて、話者が自分の母語についてもっている文法的な知識の総体を明らかにすることが言語学者の仕事であると主張した」と著者はいう（一二ページ）。つまりチョムスキーの言語モデルは生成というモデル、これをあえて言語表現のモデルというとすれば、それはことばをはたらきとしてみるたちばに立っているとみることができよう（これは評者の発言である）。著者は、ソシュールのラングには文を作るためのメカニズムも含まれると考えるというのであるから、ソシュールも同様のたちばに立つものである、ということになる。そうすると、二十世紀の言語学では単に言語構造の記述を発達させただけでなく、チョムスキーたちによって生成というかたちでの言語表現のダイナミックなモデルを追求したことになるが、これはそのとおりであったと評者も考える。

ただし、著者もすでに十分ご存じのように、生成文法のもともとのモデルは、かならずしも人間の言語表現そのものへのアプローチではなかった。また生成文法学者の期待に反して、言語理解には、生成だけのモデルでは扱いきれないものがあることもわかってきた。この、あとのことに直接かかわったのは自然言語処理であり、そこから発して、生成文法から出発した心理言語学、また、哲学、論理学、心理学、情報科学、情報工学など、広い分野をめぐるこのような科学群の動きについても本書で言及してほしかったと評者は思う。

チョムスキーの解説については、標準理論をやや詳しく紹介し、チョムスキーの基本的な考えかたを解説することにしている。これではあるいは、生成文法本流のかたからは不満や批判が出るかとも考えられる。しかしいきなり、GB理論の説明をしたり、ミニマリスト・プログラムの説明をするわけにもいかないだろう。理論がどうしてそうなっているのか、前からの経緯を語らないと、現状の説明ができにくいようである。加えて「最近のモデルになるほど、よ

り抽象的な議論が行なわれる傾向がある」。そのため「言語学の初歩的な入門書で、その詳しい解説を行なうのは不可能である」ということになって、標準理論のレベルでの解説を行うことになる。これは全く問題がないともいいきれないが、事実上やむをえないことであろう。評者が、二、三の大学での講義について受講学生に質問してみたところでも、かなり多くの言語学、英文法などの講義で、本書と同じレベルでとどめてあるようである。

四

序章、第一章、第五章が中堅学者の新しい見かたの提示であるとすれば、第二章から第四章は新進学者の意欲作であると、評者は受けとった。第二章文の構造、第三章語の意味、第四章文の意味と、この三章は形のうえで連続しているだけでなく、内容的に連絡しあい、第二章文の構造のなかの記述が第三章をとおったあとの、第四章に連絡、結実する。そのように内容的に連絡し、ひとつの考えかたで一貫し、統一してあるということがまず第一に指摘されなければならない点であるが、第四章文の意味のところで、文の意味の表現（リプレゼンテーション）法を具体的に明示したことが第二の特色にあげられよう。これがある意味での論理形式になっているのであるが、GB理論では他の問題に議論が集中して意味の問題とくに文の意味の問題は一向に取りあげられなかったのに対して、本書では全七章のうちこの問題に一章をあてている。その点でもそこに意欲が感じられるのである。

しかしそれだけに、問題もまたある。そのひとつをいえば、七九ページで、生成変形文法を紹介しているところで、この文法理論は（六八）のような枠組をもっている、といって図示したものである。この図のなかの表層構造から上の部分は標準理論のものであり、表層構造から下はGB理論のものである。たとえば「深層構造」という日本語訳にあたる英語もdeep structure, D-structureの両者があわせて載せられている。この部分は著者自身の文法理論ではなくて、世にはこのような理論があるという意味で引用されているように思われるが、それならば一層、きちんと標準理論かGB理論かいずれかに整理して書くべきである。著者自身そんなことは百も承知で、ただ細部にこだわらず、この理論の基本的考えかたではこうなる、というくらいの扱いかたでこの図を書いたのかと思う。しかし本書がテキストとして学生の手にわたることを考えると、それは適切な扱いとはいえない。序章の著者がこれについて慎重に正確に扱い、適切な措置をとっているのと対照的である。

以下、第二章から第四章までの著者の力量に驚嘆しつつ、問題点のいくつかを拾って評者の見解を述べたい。

八一ページに「第四章で述べるような、文において使用される形態素および文の構造からその意味表示を導く規則が精密に規定されれば、日本語（のみならず英語を含む世界の諸言語）の統語論において変形は必要ではなくなるかもしれない」とあるが、大胆で魅力あふれる発言であるにもかかわらず、すくなくとも要素の移動ということをあれほど愛用している英語などの文法をみると、容易に納得しがたい。この部分こそ注をつけてなにかの見とおしや理由を述べてほしかったと思う。

八五ページに意味の指示対象説があり（できれば「あけの明星」の例など出してもらいたかったが、それはいわない）、これは第三章のなかで

の重要な部分であるようだが、どこまでが従来の説で、どこから著者の手が加わっているのかはっきりしない。著者自身が主張する部分に、はっきりと見出しをつけてほしい。

一〇六ページ。格と意味役割のところで、著者が意味論的な格を語に割りあてているらしいことがわかる。これをになうのは機能語であることになる。そしてなるほど、それはうまい解決法だと評者は感心した。こうすれば語の意味の「足し算」をすることによって文の意味が形成されるような道をつけることができる。しかし、助詞などを使わず、語形変化のない言語ではどうするのか、ゼロ機能語を考えるのか。なにより自立語の意味がひびきあってできる環境をどう表現したらよいのか。

七五ページの結合価文法について。これは評者が使用している文法だけに一言。日本語の文の第一次的解析のためには、コンピュータ使用のばあいにも、文→述部という生成規則のほうが有効かもしれない。しかし文の意味を理解するときは、表層でなにが欠けているかを認識することが必要で、そのとき結合価文法が有用であることを評者はかつて機械実験で示したつもりである。日本語のような言語ではこの文法がむしろ一層有効だと評者は考えている。

本書は、使いやすいかどうかは別として、魅力あふれるテキストである。研究書として読まれることも期待したい。文中、不適切な表現があれば著者たちにおわびしたい。

（一九九三年九月二十日発行　東京大学出版会刊　A5判　二五九ページ　二五七五円）

――日本女子大学教授――

（平成六年五月二十三日　受理）